

2017年10月1日

**「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」 ヨハネ 8 : 51**

主イエスとユダヤ人の論争（3章と5章に続く第3ラウンド!）で、信じる者は主と共に永遠に生きる、と語られます。

彼らが、「あなたはサマリア人（背教徒）で悪霊に取りつかれている」と攻撃すると、主は「わたしは父（なる神）を重んじている」と反論し、「わたしの言葉を守る」（主から離れずにいる→8 : 31）者に、永遠の命を約束されます（→3 : 15）。「疑いもなくキリストは、この群衆の中にも治癒し得る人たちがいると知っておられた。」（カルヴァン）

主がご自分を権威ある者とされるので、ユダヤ人たちは、「決して死を味わうことがない」とは「いったい、あなたは自分を何者だと思っているのか」と反発します。主は、父なる神について、「わたしはその方を知っており、その言葉を守っている」として、神と等しい力を持っているとされます（「癒し主イエス!」）。

主にとって、アブラハムは親しい存在で（近所のおじさん!）、「（メシアとしての）わたしの日を見るのを楽しみにしていた」のであり、主は「アブラハムが生まれる前から」（地上では「50歳にもならない」のに）存在された方です。

主と共にある私たちは、豊かな祝福（四重の福音!）を約束されて、「主のものとなりけり」（讃 529 番）と喜びます。

2017年10月8日

**「イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。」 ヨハネ 9 : 1**

「神殿の境内から出て行かれた」主イエスは、町の中で生まれつきの盲人と出会い、その目を開けて明るくされます。

弟子たちは冷たい見方をし、「だれが罪を犯したためですか」と原因を探りますが、いつもそうとは限りません（→ヨブやパウロ）。主は、そういう過去の詮索よりも、「神の業がこの人に現れるため」という未来に目を向けることが大切だ、とされます（日野原重明!）。

その神の業を実行するのは主の働きです。「わたしたちは…（神の）業を、まだ日があるうちに（十字架の前に!）行わねばならない」として、「イエスは…唾で土をこねてその人の目に」塗られます。「キリストはその到来によって、普段にはない新しい輝きを生じさせたもうた」（カルヴァン）ので「世の光」です。

この盲人は、主に言われた通り、「シロアム—『遣わされた者』（メシア）の池」に行き、「目が見えるようになって、帰って来」ます。彼をよく知る人々でさえ、「その人だ」と言う者も、「似ているだけだ」と言う者もいるほど、彼の顔つきが変わって、喜びに満ちています。

体の目と共に心の目が開いた時、この盲人は生きる元気が与えられます（年長者も!）。「安かれ我が心よ、主イエスは共に」（讃 298 番）と明るく生きます。

2017年10月15日

**「ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。」 ヨハネ9:15**

盲人の癒しを巡って、ファリサイ派が取り調べをする中で、本人と両親が勇気を持って主イエスを証しします。

「どうして見えるようになったのか」という質問に対して、盲人は主がして下さった事実だけを答えます。「安息日を守らない」ことを問題にする頭の固い人もいる一方で、「罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う頭の柔らかい人もいます。盲人は「あの人は預言者です」と大胆です。

批判的な多数派はついに両親を呼び出し、①「この者はあなたたちの息子か」②「生まれつき目が見えなかったか」③「どうして今は見えるのか」、と質問しますが、彼らは①と②は事実だとして、主への感謝を表明します。「両親はその複雑な質問全体の中から、半分だけを選んで答えている。」(カルヴァン)

しかし、③については、「本人にお聞きください」と言うだけで、自分たちは現場にいなかったので証言できないという態度を貫きます(賢い両親!)。「会堂(シナゴグ)から追放」されると生活ができません(戦時中の福山教会→『御言葉に導かれる教会』133頁以下)。

ルターは教皇の破門予告に勇気をふるって「私はここに立ちます」と断言し、「神はわがやぐら」(讃267番)とします。

2017年10月22日

**「ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見える…。」 ヨハネ9:25**

ファリサイ派は二度目に盲人を尋問しますが、彼は主がしてくださった事実を忘れない故に大きな力を出します。

彼らは盲人が嘘をついていると疑って、「神の前に正直に答え(て栄光を帰し)なさい」と脅しますが、彼は「今は見える」と事実を語り、主はモーセ以上に力があり、「神のもとから来られた」方だと告白します。事実は人を力付けます(復活の主と出会ったパウロ→Iコリント15:7「わたしにも現れた」)。

彼らは怒って「彼を追い出し」ますが、主は彼を見つけて「あなたは人の子(となった神の御子=メシア)を信じるか」と問われ、彼は「主よ、信じます」と告白してひざまずきます。「この盲人は、キリストが神の子であると確信して…彼の前にひれ伏した。」(カルヴァン)

主が「わたしがこの世に来たのは…見えない者は見えるように…見える者は見えないように」するためだと言われるのを聞いて、ファリサイ派は反発しますが、「『見える』とあなたたちは言っている」のが問題だ、と言われる(病気を認めないために治らない人!)

盲人は「ただ一つ」のこと、即ち「イエスという方」のおかげで「今は見える」ことを感謝し、「主イエスを知りたる嬉しきこの日や」(讃516番)と歌います。

2017年10月29日

**「門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。」 ヨハネ 10: 3**

主イエスは、ファリサイ派が指導者として不適格なので、「群衆が飼い主のいない羊」（マタイ 9: 36）のようだと、本当の羊飼いの姿を教えられます。

先ず「悪い羊飼い」は、「羊の囲いに入るのに門を通らないで…盗人…強盗」として、自分の利益を求めてやって来る者で、「羊は…決してついて行かない」でしょう（→「何のことか分からなかった」ファリサイ派の人々）。

次に「良い羊飼い」は、「門から入る者は、羊の羊飼」（口語訳）と言われる通り、「門番」から認められています。「この語を神と理解したい人がいても私は反対しない。」（カルヴァン） 「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出し…羊はその声を知っているの、ついて行く」でしょう（牧師と信徒の関係！）。

また「幸せな羊」は、「わたしは羊の門である」と言われる主イエスを信じる者たちです。「わたしを通して入る者は救われ…牧草を見つける」でしょう（良い羊飼いたちに導かれて!）。主は「羊が命を受け…豊かに（溢れるほど）受けるため」に来てくださったのです。

聖書の説き明かし（説教）を聞きながら、神の声、主イエスの声を聞き分ける者になれば幸いです。「飼い主わが主よ」（讃 354 番）と歌いつつ歩みます。